様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：５２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ２１５７１

研究課題名（和文）＜考える哲学・倫理学の授業＞の実質化のための研究

研究課題名（英文）Research for convert a class in philosophy and ethics into fostering thinking

研究代表者
村瀬　智之（Murase, Tomoyuki）

東京工業高等専門学校・一般教育科・准教授

研究者番号：００７０６４６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、＜考える哲学・倫理学の授業＞を実現するためにその理念や授業の方法、評価のあり方等について研究を進めてきた。＜考える哲学・倫理学の授業＞とは、従来の思想史の学習を中心とする哲学や倫理学とは違い、思想史的知識を踏まえた上で学習者同士で議論・対話をしながら考えを深めることを重視する授業である。
　本研究では、対話型の哲学教育である「子どもの哲学」に注目し、その理念や教育方法を取り入れた国内の学校でも実現可能な授業のあり方を提案・検証した。具体的には、授業に用いることのできる教材づくり、教材を有効に用い、従来型の授業との接続を可能にする授業の形式の提案、評価のあり方についての検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、＜考える哲学・倫理学の授業＞が実際の教育現場で実現できるようなあり方を模索してきた。学習者同士で対話や議論をしながら考えていくこと、その結果、他者と対話する力や考える力を身に付けていくことは、多くの子どもたちにとって必要不可欠なことであろう。この点において、本研究の成果には一定の社会的な意義が認めらると思われる。
　また、本研究は、教育学だけでなく、哲学や倫理学の教育全般の理念やその理解を深化させるものでもある。その点においても一定の学術的な意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：In this study, in order to convert philosophy and ethics classes into classes that foster thinking, We researched the aim, teaching methods, and evaluation of those classes. Conventionally, the study of the history of ideas has been the main focus of philosophy and ethics classes. We aimed to change those and create a class where students could think through discussions and dialogues with each other. However, these are new class formats for Japanese schools. Therefore, there are many difficulties in realizing them.
In order to solve these difficulties, we focused on "Philosophy for Children," which is an interactive type of philosophy education. We then proposed a method of teaching that can be implemented in Japanese schools, incorporating the philosophy and educational methods of "Philosophy for Children. Specifically, we proposed and discussed the effective use of teaching materials, the form of classes that can be connected with conventional classes, and the way of evaluation.

研究分野：現代哲学・哲学教育

キーワード：哲学・倫理学教育　子どもの哲学　思考力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中等教育における哲学倫理学に関する教育は、従来、体系的に出されてきた哲学史思想史といった知識の教授を重視する立場から、それらを用いた思考力の涵養を重視する授業への過渡期にある。これはそもそも初等中等教育全体における潮流、具体的には、＜対話的で深い学び＞を目標とする学習指導要領の改訂と結びついたものである。哲学・倫理学の分野においては平成 27 年 5 月に日本学術会議哲学委員会から出された提言「未来を見すえた高校公民科倫理教育の創生－＜考える「倫理」＞の実現に向けてー」 では、新しい思考力を提唱し、「自ら考え自ら判断し自ら実践する能力、根源的な問いを問い続ける思考力、他者と人間的に向き合う力、 社会に参画する「市民」としての資質の向上」を挙げ、その上で、これらの能力が求められるという点については、「教育をめぐる国内外の議論はほぼ一致して」いる、としている（p.iv）。

このような授業の転換を図る動きの中で注目されてきたのが子どもの哲学と呼ばれる対話型の哲学教育である。 「子ども哲学」は、世界各国での実践やその後の調査によって教育効果がほぼ検証されているということから、日本国内への応用を見すえた研究・実践が行われてきており、＜考える哲学・倫理学の授業＞を検討するにあたって、もっとも有望な候補の一つである。

２．研究の目的

本研究においては上記の背景のもとに、＜考える哲学・倫理学の授業＞への転換を目指して子どもの哲学をベースとした対話型の哲学教育のあり方を検討した。

本研究において特に重視したのが実際の教育現場や授業において実施可能な授業であるという点である。新しい授業の形態である子どもの哲学に関しては国内への応用に関していくつもの問題点が指摘されてきた。たとえば、 対話や議論に慣れていない指導者・学習者にとって、対話や議論が非常に難しいといった点や、対話や議論に慣れるためには時間がかかるため、知識教育との両立が難しいといった点である。これらに加えて本研究計画の中で明らかになってきた様々な問題点もある。それは、たとえば、子どもの哲学において中心的な活動となる哲学対話に使うことのできる教材の少なさや、その哲学対話を評価するための基本的な指針や方法論の欠如、子どもの哲学に関する基本的な理解の欠如といった問題である。

そのため、本研究計画の目的は、上記の問題点を解消すること、具体的な授業のあり方を提示するということである。

３．研究の方法

①．哲学教育 の方法にかんする研究文献や教材を収集、調査する。必要に応じて、実践者を招き、授業のやり方やその理念等を学ぶ。

②．現状において不足していると思われる授業のための教材づくりを行うとともに、多くの人に利用な形で公開する。

③．上記の研究をもとに、哲学教育の実践の調査研究 初等・中等教育において実践されている対話型の哲学教育を観察し、 実践者に聞き取り等を行うとともに、実際の初等中等教育の教員と連携しながら具体的な授業を作成するとともに、授業実施のために必要不可欠な条件の洗い出しを行い、作成された授業計画を実施し研究協力者などとも連携しながらそれらに対する効果測定や検証を行い、錬成していく。

④．対話型の哲学教育の基礎となる諸理論の分析のための基礎理論の研究を行う。

⑤．対話型の哲学教育を様々な現場で実践することを通し、広くその意義を知らせるとともに、多様な現場の教員との交流を持つことを通して、授業手法および授業案を錬成していく。

４．研究成果

①．子どもの哲学をベースとした対話型の哲学教育の具体的なあり方を検討するために、これまでの子どもの哲学においてどのような議論がなされてきたのかを精査する必要がある。文献資料や教材を収集し、分析することを通して、実際の授業への応用可能性を示した。具体的には、国内の実践が大きく影響を受けている米国ハワイ州での実践と初期の子どもの哲学の実践を比較することを通して、それらの強調点の違いを明らかにするとともに、授業理念における強調点にも違いがあることを明確にした。（研究成果等、1、2、3、5、7）

②．対話型の哲学教育の教材になりうる資料を作成するとともに、定評のある書籍の翻訳に関わった。これらを通して、どのような教材のあり方が＜考える哲学・倫理学の授業＞にとって重要であるかの知見も得ることができた。（研究成果等、10、13-17）

③．対話型の哲学教育において特に問題になる点を実践者たちとの交流を通して、教材や具体的な授業の欠如や、司会進行に関する不安、評価にまつわる問題点が明らかとなった。これらに対して、司会進行の方法論等を明確にするだけでなく、教材と共に対話型の授業を行う「媒介教材を用いた授業」を提案した。また、＜考える哲学・倫理学の授業＞における授業評価についても、文章等で評価する際に使用可能な方法論を提示するだけでなく、対話型授業における評価手法も検討し、それらの効能と限界を示した。（研究成果、1、4、

6、8、9、11、12、20、21、23、24、25）

④．子どもの哲学の基礎理論としてリップマンをはじめとする理論家たちの議論を整理するとともに、それらが、いわゆるアカデミックな哲学と相互参照可能なものであることを示した。また、対話型の哲学教育が育成されるとされる様々な能力をより詳細に分析するための基礎理論としての方法知の概念を分析・整理した。（研究成果等、1、2、3、5、7）

⑤．多様な学校種、対話型のイベント等に参加し、対話型の哲学教育のもつ広い射程を示すとともに、その意義や問題点について様々な利害関係者から意見聴取を行った。（研究成果等、26-35）

５．研究成果等

＜論文等＞

1．村瀬智之「「哲学に関わる対話的手法」を用いた公民科授業づくりの試み　－「媒介教材を用いた授業」を事例として－」、『思考と対話』（掲載決定済み（頁数未定）、日本哲学プラクティス学会、2021 年。【査読有】

2．村瀬智之「学生の主体的活動を軸とした技術者倫理教育の試み」、『工学教育』（掲載決定済み（頁数未定）　）、日本工学教育協会、2021 年。【査読有】

3．村瀬智之、「方法的知識と傾向性 ― 方法的知識はいかなる知識か？」『哲学』、日本哲学会、第 72 号、164-175 頁、 2021 年 4 月。【査読有】

4．西山渓・村瀬智之・小川泰治、「子どもの哲学と民主主義ー選好の変化とコンセンサス形成を可視化するワークの開発と実践」、『思考と対話』、日本哲学プラクティス学会、2 号、26-37 頁、2020 年。【査読有】

5．村瀬智之、「「子どもの哲学」を基礎とした哲学対話の授業」、『平成 30 年度都倫研紀要』、東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会、57 集、67-76 頁、2019 年。【招待有】

6．Ogawa, T., Murase, T., Nishiyama, K., （2019）. “Engineering Education as Citizenship Education by P4C”, 13th International Symposium on Advances in Technology Education（ISATE2019）Full paper library.【査読有】

7．村瀬智之・土屋陽介、「「子どもの哲学」が問いかけるもの－その教育理論と哲学的問題」、『哲学』、日本哲学会、69 号、90-100 頁、2018 年。【招待有】

＜書籍（監訳を含む）等＞

8．河野哲也編、得居千晶、永井玲衣編集協力、『ゼロからはじめる哲学対話―哲学プラクティスハンドブック』、ひつじ書房、2020 年 10 月。（第 2 章-5、第 3 章２，５，６を共同で担当、第 4 章-5 を担当）

9．村瀬智之、「「公共」の新しい授業方法と評価」、『「公共の扉」をひらく授業事例集』（東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会編）、清水書院、22-29 頁、2018 年 11 月。

10．河野哲也、土屋陽介、村瀬智之、神戸和佳子、松川絵里、『この世界のしくみ　子どもの哲学２』、毎日新聞出版、2018 年 4 月。

11．村瀬智之、「どうすれば授業で考えることができるのだろうか」、『高校倫理の古典でまなぶ　哲学トレーニング１』（直江清隆編著）、岩波書店、172-181 頁、2016 年 10 月。

12．村瀬智之、「どうしたら小論文をうまく書けるのだろうか－評価するって難しい？」、『高校倫理の古典でまなぶ　哲学トレーニング２』（直江清隆編著）、岩波書店、198-203 頁、2016 年 10 月。

13．土屋陽介監修、村瀬智之・神戸和佳子協力・著他、『こころのナゾとき（小学 1・2 年）』（うち 7 編（計 28 頁）の執筆を担当、コラム協力）、成美堂出版、2016 年 4 月。

14．土屋陽介監修、村瀬智之・神戸和佳子協力・著他、『こころのナゾとき（小学 3・4 年）』（うち、4 編（計 16 頁）の執筆を担当、コラム協力）、成美堂出版、2016 年 4 月。

15．土屋陽介監修、村瀬智之・神戸和佳子協力・著他、『こころのナゾとき（小学 5・6 年）』（うち、4 編（計 16 頁）の執筆を担当、コラム協力）、成美堂出版、2016 年 4 月。

16．デイビッド・ホワイト著、村瀬智之監訳、上田勢子・山岡希美訳、『教えて！哲学者たち－子どもとつくる哲学の教室（下）』、大月出版、2016 年 12 月。

17．デイビッド・ホワイト著、村瀬智之監訳、上田勢子・山岡希美訳、『教えて！哲学者たち－子どもとつくる哲学の教室（上）』、大月出版、2016 年 11 月。

＜招待講演・発表等＞

18．○村瀬智之、「子どもの哲学と不登校」、オンライン・シンポジウム「不登校と哲学プラクティス」（日本学術振興会科学研究費基盤 B　19H01185「哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援考察」（代表：稲原美苗）主催）、2021 年 1 月 30 日。【招待講演】

19．○Nishiyama, K., Murase, T., & Ogawa, T., (2019). Community of Philosophical Inquiry without Consensus?: Insights from Meta-Consensus, in: The 19th Biennial International ICPIC Conference, Bogotá: Colombia. Jul 25.2019.【審査有】

20．○村瀬智之、「「子どもの哲学」および哲学対話実践の意義とその背景について」、東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会（平成 30 年度第 3 回例会）、於東京工業高等専門学校、2019 年 2 月 4 日。【招待講演】

21．○村瀬智之、ワークショップ「日本における「哲学プラクティス」とは何か？」、哲学

プラクティス学会第一回大会、於明治大学、2018 年 8 月。（小川仁志氏（司会）、土屋陽介氏、高橋綾氏、ほんまなほ氏とともに登壇。）

22．○村瀬智之、「上級生による子どもの哲学の司会進行の試みとその意義」、p4c Japan 第一回 p4c かたろう会、於神戸大学附属中等教育学校、2018 年 8 月。（ポスター発表）

23．○村瀬智之、「学校で考え議論するって本当に可能ですか？―道徳・アクティブラーニング・哲学対話の新教育観を探る―」、哲学プラクティス連絡会第 3 回大会、於立正大学、2017 年 10 月 21 日。（西野真由美氏の講演に対するパネリストの一人として、有賀慎平氏、岡田博元氏、小正和彦氏、関康平氏と共に登壇。）

24．○村瀬智之、「哲学カフェ×哲学教育－日本において、哲学カフェは哲学か？－」、立正大学哲学会 2016 年度秋冬大会 公開シンポジウム、於立正大学、2017 年 2 月。（戸谷洋志、木村史人と共に登壇。）【招待講演】

25．○村瀬智之、「哲学対話と知識教育との接続に向けて　－媒介教材を用いた授業の検討－」、哲学プラクティス連絡会第二回大会、於立教大学、2016 年 8 月。

＜その他、社会的活動等＞

26．東京学芸大学附属高等学校の公開研究会にて公民科の助言講師を務める。（2020 年 11 月 7 日）

27．沖縄県名護市立緑風学園久志小学校にて特別授業の授業担当者を務める。（2020 年 2 月 21 日）

28．沖縄県浦添市立前田小学校にて教員研修の講師を務める。（2020 年 2 月 20 日）

29．東京工業高等専門学校にて、東京都の高等学校の教員向け（東京都高等学校「倫理」「現代社会」研究会）公開授業における授業者を務める。（2019 年 2 月 4 日）

30．琉球新報社主催で沖縄県浦添市「浦添大公園」にて行われた自然観察会をベースとした哲学対話のファシリテーターを務める。（2018 年 10 月 16 日）

31．神戸大学にて、第 77 回日本哲学会大会、哲学教育ワークショップ「高等学校新科目「公共」を「考える哲学・倫理」学を生かすために－」の司会を務める。（2018 年 5 月 18 日）

32．沖縄市立比屋根小学校にて、子どもの哲学の授業（4 年 1 組、45 分×2 時間）の授業者を務める。（2017 年 9 月 19 日）。

33．琉球新報社にて、「哲学対話のすすめかた講座」（初心者向け）の講師を務める。（2017 年 9 月 18 日。）

34．琉球新報社にて、「哲学対話のすすめかた講座」（午前初心者向け、午後中級者向け）の講師を務める。（2017 年 2 月 26 日。）

35．茅ヶ崎市民ギャラリーにて、茅ヶ崎市教育委員会主催、社会教育講座・子ども哲学カフェの講師を務める。（2016 年 12 月 4 日。）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 村瀬智之	４．巻 57
２．論文標題 「子どもの哲学」を基礎とした哲学対話の授業	５．発行年 2019年
３．雑誌名 平成30年度都倫研紀要	６．最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村瀬智之・土屋陽介	４．巻 69
２．論文標題 「子どもの哲学」が問いかけるもの－その教育理論と哲学的問題	５．発行年 2018年
３．雑誌名 哲学	６．最初と最後の頁 90-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11439/philosophy.2018.90	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村瀬智之	４．巻 3
２．論文標題 「「哲学に関わる対話的手法」を用いた公民科授業づくりの試み　－「媒介教材を用いた授業」を事例として－」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 思考と対話	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村瀬智之	４．巻 69
２．論文標題 「学生の主体的活動を軸とした技術者倫理教育の試み」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 工学教育	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村瀬智之	４．巻 72
２．論文標題 「方法的知識と傾向性 ― 方法的知識はいかなる知識か？」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 哲学	６．最初と最後の頁 164-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11439/philosophy.2021.164	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Ogawa, T., Murase, T., Nishiyama, K.
２．発表標題 Engineering Education as Citizenship Education by P4C
３．学会等名 13th International Symposium on Advances in Technology Education（ISATE2019）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nishiyama, K., Murase, T., & Ogawa, T.
２．発表標題 Community of Philosophical Inquiry without Consensus?: Insights from Meta-Consensus
３．学会等名 The 19th Biennial International ICPIC Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 村瀬智之（小川仁志氏（司会）、土屋陽介氏、高橋綾氏、ほんまなほ氏とともに登壇。）
２．発表標題 ワークショップ「日本における「哲学プラクティス」とは何か？」
３．学会等名 哲学プラクティス学会第一回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 村瀬智之
２．発表標題 上級生による子どもの哲学の司会進行の試みとその意義（ポスター発表）
３．学会等名 p4c Japan 第一回p4cかたろう会
４．発表年 2018年

１．発表者名 村瀬智之
２．発表標題 「子どもの哲学」および哲学対話実践の意義とその背景について
３．学会等名 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会（平成30年度第3回例会）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 村瀬智之
２．発表標題 哲学対話と知識教育との接続に向けて　－媒介教材を用いた授業の検討－
３．学会等名 哲学プラクティス連絡会第二回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 村瀬智之（戸谷洋志、木村史人と共に登壇。）
２．発表標題 哲学カフェ×哲学教育－日本において、哲学カフェは哲学か？－
３．学会等名 立正大学哲学会2016年度秋冬大会（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計10件

１．著者名 河野哲也、土屋陽介、村瀬智之、神戸和佳子、松川絵里	４．発行年 2018年
２．出版社 毎日新聞出版	５．総ページ数 184
３．書名 この世界のしくみ　子どもの哲学２	

１．著者名 村瀬智之	４．発行年 2018年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 343
３．書名 精選現代文B　指導資料（「豊かな言語活動のために①「主張の吟味」」を担当）	

１．著者名 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会	４．発行年 2018年
２．出版社 清水書院	５．総ページ数 200
３．書名 新科目「公共」「公共の扉」をひらく授業事例集（「「公共」の新しい授業方法と評価」の執筆を担当）	

１．著者名 村瀬智之	４．発行年 2016年
２．出版社 成美堂出版	５．総ページ数 191（内、28頁を担当）
３．書名 土屋陽介監修『こころのナゾとき（小学１・2年）』（うち7編の執筆を担当）	

１．著者名 村瀬智之	４．発行年 2016年
２．出版社 成美堂出版	５．総ページ数 191（内、14頁を担当）
３．書名 土屋陽介監修『こころのナゾとき（小学3・4年）』（うち4編の執筆を担当）	

１．著者名 村瀬智之	４．発行年 2016年
２．出版社 成美堂出版	５．総ページ数 191（内、16頁を担当）
３．書名 土屋陽介監修『こころのナゾとき（小学5・6年）』（うち4編の執筆を担当）	

１．著者名 村瀬智之	４．発行年 2016年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 186（172-181頁）
３．書名 直江清隆編著『高校倫理の古典でまなぶ　哲学トレーニング１』	

１．著者名 村瀬智之	４．発行年 2016年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 203（198-203頁）
３．書名 直江清隆編著『高校倫理の古典でまなぶ　哲学トレーニング２』	

1．著者名 デイビッド・ホワイト	4．発行年 2016年
2．出版社 大月出版	5．総ページ数 144
3．書名 教えて！哲学者たち－子どもとつくる哲学の教室（下）（監訳を担当）	

1．著者名 デイビッド・ホワイト	4．発行年 2016年
2．出版社 大月出版	5．総ページ数 150
3．書名 教えて！哲学者たち－子どもとつくる哲学の教室（上）（監訳を担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京学芸大学附属高等学校の公開研究会にて公民科の助言講師を務める。（2020年11月7日）
沖縄県名護市立緑風学園久志小学校にて特別授業の授業担当者を務める。（2020年2月21日）
沖縄県浦添市立前田小学校にて教員研修の講師を務める。（2020年2月20日）
東京工業高等専門学校にて、東京都の高等学校の教員向け（東京都高等学校「倫理」「現代社会」研究会）公開授業における授業者を務める。（2019年2月4日）
琉球新報社主催で沖縄県浦添市「浦添大公園」にて行われた自然観察会をベースとした哲学対話のファシリテーターを務める。（2018年10月16日）
神戸大学にて、第77回日本哲学会大会、哲学教育ワークショップ「高等学校新科目「公共」を「考える哲学・倫理」学を生かすために－」の司会を務める。（2018年5月18日）
沖縄市立比屋根小学校にて、子どもの哲学の授業（4年1組、45分×2時間）の授業者を務める。（2017年9月19日）。
琉球新報社にて、「哲学対話のすすめかた講座」（初心者向け）の講師を務める。（2017年9月18日。）
琉球新報社にて、「哲学対話のすすめかた講座」（午前初心者向け、午後中級者向け）の講師を務める。（2017年2月26日。）
茅ヶ崎市民ギャラリーにて、茅ヶ崎市教育委員会主催、社会教育講座・子ども哲学カフェの講師を務める。（2016年12月4日。）

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関